東畝生誕200年記念展

藤澤一族の軌跡

1994年10月12日(水)～30日(日)

●開　館　時　間／午前9時～午後5時（入室は閉館の30分前まで）
月曜日休館

●入　　館　　料／一般300円・高大生150円・小中生80円
（団体20名様以上は2割引）

●主　　催／塩江美術館

●後　　援／藤澤家　関西大学 東西学術研究所　藤澤会　四国新聞社

■同時開催　熊野俊一作品展　（常設展示室）

■次回展覧会のお知らせ　第12回新構造香川支部展（11月2日～6日）

ホタルの里美術館
町立 塩江美術館
香川県香川郡塩江町大字安原上字星越602番地
TEL（0878）93－1800（FAX共通）

藤澤一族の紹介

・藤沢東畝（とうがい）

寛政六年（一七九四）十月十三日、塩江町中村五名部落に生まれました。
東畝はその名を甫（はじめ）といい、通称は昌蔵、字は元発（もとのり）、号を東畝とし、その名がよく知られている。九才のときに、横井村（香南町）中山城山塾に入門した。文政七年（一八二四）に大阪に移り、「泊園書院」塾を開き、儒学を大阪の地に花ひらしたのである。

・藤澤南岳（なんがく）

東畝の長男として、天保十三年（一八四二）九月九日に生まれました。

南岳は父東畝から学識才能を豊に譲り受けました。南岳は、慶応二年（1865）二十三歳の若さで、高松藩の儒官となりました。その高松藩主十一代頼聡公のとき高松藩が朝敵の汚名をかぶろうとしたときに、南岳はその危機を救いました。また、南岳を語るエピソードとして、世間によく知られている事として、薬品名の「仁丹」は、その社長がこの新薬が製造された時に、ネームをつけてもらったといいます。そして、皆さんに親しまれている道頓堀の「通天閣」や小豆島の「寒霞渓（かんかけい）」の名称も南岳がつけました。

・藤沢黄鵠（こうこく）

明治七年（一八七四）一月一日に生まれました。

名は元造（もとぞう）、字は士亨（あざな）、号は西周といい、後に黄鵠といいました。泊園書院の三代目を継ぎましたが、衆議院議員として選出され、代議士として多忙な公務にたずさわりました。また、有名な話しに国定教科書事件があります。これは、歴史の教科書にある室町時代に始まった南朝北朝の皇統の正否を問う論争で、時の桂内閣に迫り、政府を苦しめました。

・藤沢黄坡（こうは）

明治九年（一八七六）三月七日大阪で生まれました。名は章次郎、字は士明、幼少の頃より、父南岳の教えを受け、漢学を学びました。大正十三年（1924）黄鵠の死去により泊園書院の四代目を継ぎました。

・藤澤桓夫（たけお）

明治三十七年（一九〇四）七月十日、大阪で生まれました。
黄坡の長男として祖父南岳の初孫として、桓夫という名も南岳が命名しました。
桓夫は、大阪高等学校をでて、東京帝国大学国文科を卒業しました。高等学校時代に、同人誌「龍舫」「辻馬車」を創刊し、この「辻馬車」の第三号に発表した「首」が、新感覚派の横光利一・川端康成・片岡鉄兵に認められました。昭和八年頃から大阪に定住し、「文学界」同人となって作家活動をするようになりました。そして、朝日新聞に「花粉」を発表し、昭和十六年（一九四一）同新聞に「新雪」を連載し、これが、大衆文学賞をとり、その内容は読者を魅了し、映画化されました。